

ところがなくなり、無機質な顔になり、感情表現が直截ではなくなってしまうのです。南大門市場のあちこちにたたずんでいる私設両替商の「オバチャン」(そう呼んだほうがピッタリ)群は、なんだか活気があって、ヒルトンホテルの人々とは違うように思いました。実は、大変なお金持ちで豪華マンションに住んでいたりするらしいのですが。

前回の旅の際に、私達を案内してくれた人はソウル育ちの娘さんでした。その彼女が、慶州からの帰りのバスの切符の入手の際、すごい剣幕で切符売り場の人とやりあったので、またまた新鮮な驚きを感じました。誰もが認める美人の彼女が、足でじだんだ踏み、声をあらげ(実は遠くから見ていたので声は聞こえなかったのですが、大きな声でまくしたてていることが感じ取れたのです)、昨日切符が残っているからだいじょうぶと言っておきながら、今になってないとはなにごとだと抗議していたのです。なんだか大変なことになっているみたいと、遠くからおそろおそろ眺めていた私と姪とは彼女の“じだんだの抗議”のおかげで、ソウルまで無事帰ることができ、翌日の彼女のお兄さん宅でのお正月の集りに間にあったのでした。釜山、南大門、慶州の市場で出会った元気印の「オバチャン」群と同じ気質がソウル育ちの娘さんにも脈々と伝わっていることを感じます。

2回の韓国への旅を通じてもっと韓国のことを学ぶ必要を感じました。儀我先生に教えていただいた司馬遼太郎の『『街道を行く』2 韓の国紀行』を帰国してから読みましたが、日本を知るためにも韓国から学ばねばとの思いを新たにしました。

“Good experience !”

広瀬裕子

釜山で解散後、私たちは再度ソウルに戻った。私達というのは、池本、高橋(祐)、鈴木(直)、西村、木幡の各氏と、私の合わせて6人である。釜山から直接日本に帰らずソウルに戻ったのは、成田—ソウルを往復した方が、たとえ釜山からソウルまでの移動費を考慮しても、だいぶ安上りだったからである。

移動方法としては、長距離バスを利用する、鉄道を利用する、そして国内線を利用するという3つが現実的な方法としてあった。それぞれ一長一短で、要するに移動時間と費用が反比例する、そのどちらに価値をおくかという問題である。多少高くても(高いとは言っても国内線<釜山—ソウル>は高々6千円ぐらいなものである)時間を節約しようと、結局私たちは、国内線を使うことにした。

前置きが長くなった。実はこの国内線での体験を書こうと思う。

国内線の案内板にはハングルと数字しかない。「ソウル」のハングル綴りくらいはわかるが、勝手の知らない別世界に来た気がした。ロビーで待つ乗客は、大部分が韓国のおじさんやおばさんたち。団体もいた。生活のエネルギーがむんむんする空間である。一方、周囲とは異質な光を放つ、若き女性、数十人の一行もあった。

余談ながら、私たち6人は、おじさんおばさんの方に無関心であっわけではないが、当面専らの関心事は、このきらびやかな一群が何者かということであった。奇麗にしっかりと化粧をし、いわゆるボディコンシャス風のカラフルなひざ上丈の服を纏い、よくこれだけ集めて来たと思うくらい、美女揃いであった。もし場所が場所ならばもしやとは思ったのだが、必ずしもそういう“もしや”でもないような感じもした。

「みんな奇麗な足だねえ」と誰かが言い、またじろじろ見回しておきながら「少しも動かない。見られて当然よという顔をしている」と誰かが言い（結構この観察は鋭いと私は思った）、彼女たちの近くへぶらぶら寄りながら、ついでのその中の人と会話なんぞしてニコニコ帰って来る者もいた。その会話した人によると、彼女らはステewardessの卵ということであった。

話を戻そう。案内板の表示が変わり、私たちの便の準備が始まった。係員が何やら（当然韓国語のみで）アナウンスすると、そこに並びたむろしていた群集がザワザワと動き始めた。それぞれの人が目的意識をもって動いているということは分かるのだが、どういうルールで動いているのかが分からない。前に進んでいるのではない。誰かが言った。男女別になるらしい。この情報に対してどういうリアクションをするべきか。“何で飛行機に乗るのに男女別にならなけりゃなんないの!”と異議を唱えるという、誰でも思い付くやり方も確かにある。しかし言葉が分からなければ異議の唱えようもないし、それよりも何よりも思いも寄らない事態の展開に、事情が読めなくなっている恐ろしさの方が先であった。その群集のエネルギーは凄まじく、押し合いへしあい、いつの間にやら私はその渦に巻き込まれて、あとの5人と離ればなれになった。

進む方向がひとつではないらしいが、流されるまま動くしかない。自分がどこへ行くべきかも、実際どこへ向かっているのかも分からず、周りに知人は一人もおらず、たずねる手段ももたず、そういう状況の中でふと思った。自分も周囲も私は何者かを知らないこういう状況って、私は存在していないと言うことかもしれないと。

もしもこのまま誘導されトラックに乗せられて、そのままどこかへ連れて行かれたら、文字どおり社会的に跡形もなく消滅してしまう。余りに容易に起こり得てしまいそうな事態に、

驚いて良いものやら、その発見に感動して良いものやら、現実的にその種の恐怖をかみしめて良いものやら……。それまで人生の中で何度となく恐ろしさを経験することがあった気はするのだが、この種の恐ろしさは初めてであった。恐怖の正体が見えない恐怖は、正体が分かる場合よりも自分自身の居場所を失ってしまう分、怖いと思った。大袈裟でなく、ナチに連行されたユダヤ人たちもこんな気持ちになったんだろうなあと考えた。

男女別は、結局ボディチェックのためだと分かった。韓国の国内線はチェックが厳しいことは聞いていた。チェックが済み、部屋から出た後、さてどちらへ行ったものか。人々はぞろぞろ右や左へ移動していく。あとの5人はどこにいるのだろうか。あちこち見回しても分からない。また会えるのだろうかとかさへ思った。座席は指定してあるから飛行機に乗れば会えるはずだとは思っていても、不安なものである。背伸びしても見えるのは人々の頭ばかりで、どの頭が彼らなのか分からない。

群集からちょっと出っ張った頭があった。西村氏であった。よくみるとその周囲に知った面々があった。手を振って確認した。池本氏は近くまで探しに来てくれていた。ようやく彼らとの再会である。よく映画で、お互いに走り寄り、ひしと肩を抱き合いながら再会の感動をかみしめるという場面があるが、ああしたくなるのがよく分かる心境であった。われらがそうしたわけではないが。

ほっとして周囲を見ると、少々前方にリュックを背負ったアメリカ人らしき若者が二人いた。彼らは戸惑った様子で自分を納得させるようにつぶやいていた。“Good experience!” きっと私と同じ気分を味わったのかも知れない。

## ニューヨークで見たハンゲル文字

池 本 正 純

私が韓国を意識するようになったきっかけは、ニューヨークに留学中の体験からであった。外国に出かけたり住んだりすれば、必ず自分の国や民族のアイデンティティを考える。欧米人と日本人との違いについて思い知らされることになるのだろうとはもちろん予想していた。しかし、アメリカという国に住んで韓国と日本とのつながりをかくも考えさせられるようになろうとは夢想だにしなかった。

クィーンズに住みついた当初、私は日本人が意外に多いのに驚いた。寿司屋の看板が街のいたるところに目につく。まず、その一軒に入ったときのことである。壁に寿司のカラー写